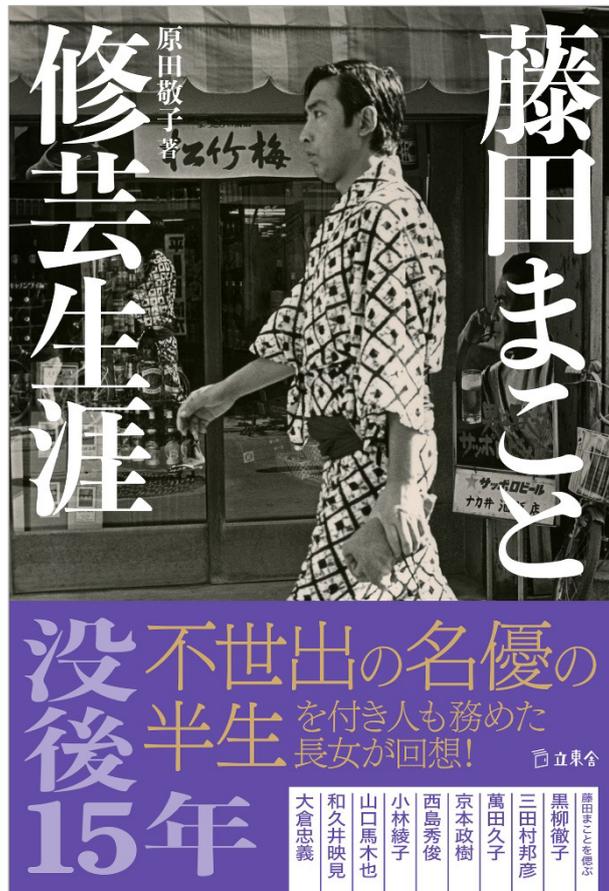


各 位

2025年2月5日
株式会社リットーミュージック

書籍『藤田まこと 修芸生涯』（原田敬子 著）が2月21日に発売に
没後15年に、付き人も務めた長女が初めて明かす名優の素顔



インプレスグループで音楽関連のメディア事業を手掛ける株式会社リットーミュージック（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：松本大輔）内で文芸・カルチャー関連を扱う出版レーベル立東舎は、『藤田まこと 修芸生涯』（原田敬子 著）を、2025年2月21日に発売します。

2010年に惜しくも亡くなり、今年没後15年となる藤田まこと。『てなもんや三度笠』『必殺シリーズ』『京都殺人案内』『はぐれ刑事純情派』『剣客商売』など数々の当たり役で知られ、その作品は今も再放送や配信で日々目にすることができる不世出の名優です。

そんな藤田まことの素顔を、長女であり付き人も務めた原田敬子が初めて綴ったのが本書です。ドラマや舞台の話題はもちろん、家庭生活の端々で見せた意外な素顔などにも触れ、庶民派スターのリアルな生き様を活写しました。

また本書には、藤田まことと共演した9名の俳優が登場。黒柳徹子、三田村邦彦、萬田久子、京本政樹、西島秀俊、小林綾子、山口馬木也、和久井映見、大倉忠義の各氏が披露された貴重な思い出からも、藤田まことの人柄が偲べれます。

「人生、あきらめたらあかん」が座右の銘だったという藤田の生涯は、決して平坦なものではありませんでした。山あり谷あり、でも常に笑いとともにあったその姿は、きっと多くの人を元気づけてくれることでしょう。

原田家の日常

わたしが幼少のころ、父・藤田まことをテレビで見るたびに、「いつも遊んでる」と思っていました。まだ芸能人という仕事を理解していなかったし、なんだか羨しそうに見えたのでしょね。

常にホテル暮らしの單身赴任なので、家から仕事に向かうときは毎回「今度は、いつ来るの？」と聞いていたものです。でもお休みになると、家族で旅行したり、食事をしたり、買い物したり……そういう時間を作ってくれた父でした。

戦後の混乱期、寂しく貧しい思いをしながら育ったので、わたしは子供にはそういう不慣れな思いさせたくないと常々言っていました。実際、忙しい中でも帰ってきてくれて、「行くぞー」と言って、一緒に自販車に乗って出かけたのです。

本当に飾り気がない父でしたので、近所の市場に行っても八百屋さんや魚屋さんといういろお話をしながら買い物をして、よくマトのポルシチを作ってくれました。家では粗食、ちりめんじゃこと大根おろし。舞台の楽屋でもそうでした。

父は昔から中華が好きで、わたしが小さいときは「豊山園」という豊中駅前中華料理屋さんが定番でした。その豊山園で鶏のから揚げ、春巻き、フカヒヒのスープ、そういつたコースを覚えてます。

仕事の合間でも中華屋さんにはよく行って、レバニラ炒めやあんかけそば、チャーハンなどを食べていました。広東料理が好きで、とくに汁そばは大好物。それこそフカヒレや北京ダックもいただきますけど、実際は庶民的なんです。

母がスナックをやっている社会的だったので、豊中のさまざまなお店と親しくしていました。だから時間があれば、町内の方を集めては母の案家の輪島や和倉温泉までバスを貸し切って旅行をしていました。父は家族と通じた時間が少なかったため、母方との賑やかな親戚付き合いも楽しんでいました。

菅井きんさん、白木理さんとのかけ合い……「必殺」には中村主水とせんじつこのシーンがありますが、豊中の自宅には、わたしの母……祖母が同居していましたので、うちは中村家そのものなんです。だから家でのやりとりを現場に持ち込んでいる感じ。でも、

表と裏の顔の落差が評判に

「必殺仕置人」
1973年放送 全26話
出演…山崎賢、沖雅也、藤田まことほか
脚本…野上龍雄、国弘威雄、安部龍雄ほか
監督…真永芳久、松本明、三隅研次ほか
制作…朝日放送 松竹

1973年4月、「必殺仕置人」が始まりました。藤田まこと一世一代の当たり役——「中村主水」の誕生です。

「必殺仕置人」は朝日放送と松竹の共同制作による必殺シリーズの第2弾で、それ以前に池波正太郎先生の小説を原作とした「必殺仕掛人」がありました。金をもらって恨みをはらす悪徳業を扱った黄色の時代劇で、フジテレビの大ヒット作「木枯し紋次郎」を倒すべく、

悪徳組として同じアウトロー系の「仕掛人」をぶつけて成功を取めました。

「仕掛人」は緒形拳さんの藤枝梅安、「仕置人」は山崎賢さんの念仏の鉄という「無類」を中心として、光と影のコントラストの強い映像のなかで、鋭い映像を始末するハードボイルドなドラマが織り広げられます。

「仕置人」の中村主水はトメであり、主人公ではありませんでした。しかし江戸の治安を預かる町奉行所の同心でありながら上役・同輩からはバカにされ、家では妻を結にイジられる「屋行灯」の「ムコ殿」は、そのサラリーマン的キャラクターが共感を集め、表と裏の顔の落差が評判になります。現代で例えるなら、警察官が殺し屋という驚きでしょうか。

中村主水を演じる経緯として、父は後年「いろんな役者に断られて、ギリギリで俺どころに回ってきた」と語っていましたが、どうやらそれはリップサービスの持ちネタで、朝日放送の山内久司プロデューサーや松竹の櫻井洋三プロデューサーによると、最初から主水役は藤田まことで確定だったようです。

藤田まことの趣味とダンディズム

父は時間に厳しい人間で、30分前行動が基本でした。

ですから、わが家は軍隊生活みたいなところがありました。所作や礼儀作法にもうるさく、わたしには門限があったのですが、もう慣れました。またたの、妹の織美子には、いろいろな意味で寛容でしたね。また外に出かけるときも、気さくにフアンの方からのサインや記念写真を応じるタイプでした。

舞台では部長を務めていましたから、若い役者さんを叱ることもありました。南塚の「必殺まっすり」では、京本政樹さんがメイクに凝って、ノーズシャドウを濃くして鼻を高く見せていたんです。それに村上弘明さんも影響されて、公油中目にノーズシャドウが濃くなっていく。「お前ら、なにしてんのやー」、呆れながら笑っていましたね。

父の舞台は男性のお客さまが多いのが特徴でした。通常、舞台というのは女性のお客さまがメインなのですが、でも父は「男性に來てもらえる芝居を作り上げた」と言っています。

趣味はゴルフ、それから買い物です。スーパーやデパート地下を回るのが好きでした。でも洋服については無頓着で、スリーサイズはわたしと妹が選んだものを着てくれました。自宅ではチェックのシャツにチェックのスポンを合わせたリ、とんでもない格好で出てくるから嫌だとしても、ぼしぼしです。

それから時代劇が多かったので、舞台の稽古着は必ず浴衣、トック番組のゲストに呼んでいただいたときも着物姿で登場し、やっぱり着こなしは好きでした。父みずから「袴」という言葉を使っていた記憶はないのですが、やはり男の美字のようなダンディズムを心がけてたんじゃないかと思えます。自宅にいてもパジャマでベッドに入り、また着替えてリビングに出かける、だらしないところを見せない人でした。

読書は池波正太郎先生や藤沢周平先生など、時代小説が多かったですね。ずっと本棚に並んでいます。わが家で、いちばんの読書家も父で「歌子、本は読まなあかんぞ」と、よく言われたのを覚えています。

すでに時代劇が下火になって久しい90年代後半にスタートした「刺客商売」ですが、「鬼平犯科帳」とともに京都映画の撮影所を支えて、見える見えないにかかわらず、多くのものが今に継承されているのではないかと思います。

美術は必殺シリーズの倉橋利雄さんとともに大映出身の西園晋信さんが担当されており、とくに嵯峨野に建てた小兵衛の家は本格的なものでした。画面に映し出される料理や小道具も、こだわりを感じさせます。

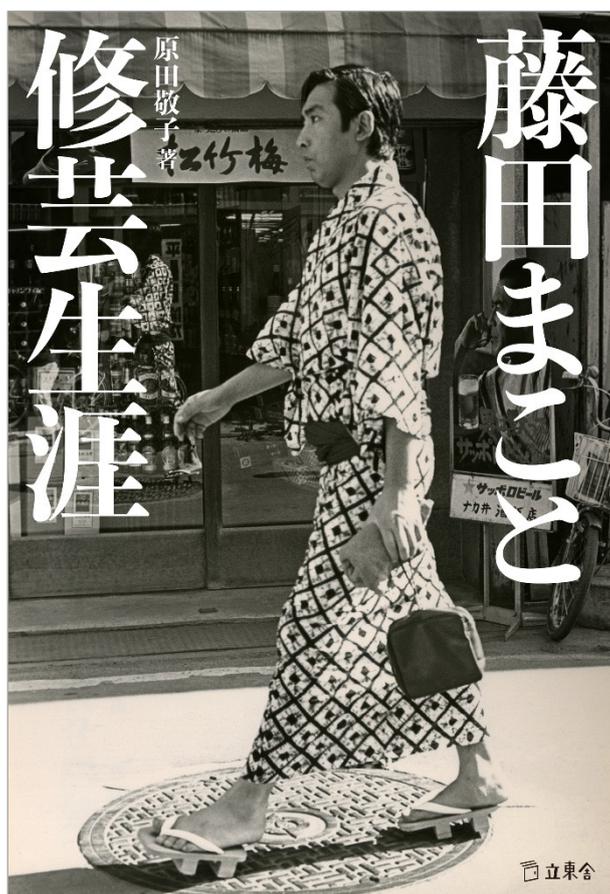
藤田まこと「御馳走帖」

わたしにとって父のイメージは、袴、なんです。食べ方がきれいでも、お寿司屋さんでもその姿を見て作法を教わるくらいでした。若いころは売れなくて苦労したはずなのに、いったいどこで学んだのでしょうか。

めざしを焼く姿だったり、おそばを食べるシーンだったり、娘ながらに味があると思えました。それゆえに池波正太郎先生の小説がもつ「食」の要素を大事にした「刺客商売」の



京都郊外の嵯峨野に建てられた「刺客商売」の秋山小兵衛宅



■書誌情報

書名：藤田まこと 修芸生涯

著者：原田敬子

定価：2,000 円（本体 2,000 円＋税 10%）

発売：2025 年 2 月 21 日

発行：立東舎／発売：リットーミュージック

商品情報ページ <https://rittorsha.jp/items/24317417.html>

CONTENTS

はじめに

第 1 章 闘病生活でも、藤田まことは藤田まこと

第 2 章 庶民派スターの原点

第 3 章 『てなもんや三度笠』の栄光と挫折

第 4 章 忘れがたき豊中の日々

第 5 章 一世一代の当たり役、中村主水

第 6 章 歩き続けた『京都殺人案内』

第 7 章 新演技座設立、舞台に生きる

第 8 章 『はぐれ刑事純情派』の意外な成功

第 9 章 60 歳で 60 億円の借金生活

第 10 章 ライフワークとなった『剣客商売』

第 11 章 主水ふたたび、『必殺仕事人 2007』

第12章 役者人生最後の花道

おわりに

藤田まことを偲ぶ

黒柳徹子

三田村邦彦

萬田久子

京本政樹

西島秀俊

小林綾子

山口馬木也

和久井映見

大倉忠義

ファミリーから見た藤田まこと

藤田絵美子

山本優

コラム

藤田まことの趣味とダンディズム

入院中に結婚報告のサプライズ

必殺シリーズ現場スナップ集

藤田まこと主要作品リスト

PROFILE

原田敬子（はらだ・けいこ）

1964年生まれ。藤田まことの長女として大阪・豊中で育ち、10代より父の付き人となる。2010年に「株式会社藤田まこと企画」の代表取締役役に就任し、父の功績を後世に残すべく活動を続けている。

【立東舎】 <https://rittorsha.jp/>

立東舎は文芸、マンガほか、さまざまな分野のポップカルチャーを紹介する出版活動を展開中。

「乙女の本棚」などの好評シリーズのほか、手塚治虫、谷ゆき子らの幻のマンガの復刻などで感度の高い読者の話題を集めている出版ブランドです。

【株式会社リットーミュージック】 <https://www.rittor-music.co.jp/>

『ギター・マガジン』『サウンド&レコーディング・マガジン』等の楽器演奏や音楽制作を行うプレイヤー&クリエイター向け専門雑誌、楽器教則本等の出版に加え、電子出版、映像・音源の配信等、音楽関連のメディア&コンテンツ事業を展開しています。新しく誕生した多目的スペース「御茶ノ水 RITTOR BASE」の運営のほか、国内最大級の楽器マーケットプレイス『デジマート』やTシャツのオンデマンド販売サイト『T-OD』等のWebサービスも人気です。

【インプレスグループ】 <https://www.impressholdings.com/>

株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証スタンダード市場 9479）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】

株式会社リットーミュージック 広報担当

E-mail: pr@rittor-music.co.jp